

『キターブ・バフリエ』の全体像とオスマン朝の地中海世界

新 谷 英 治

はじめに

『キターブ・バフリエ *Kitāb-i Bahriya*』（『海洋の書』）は、オスマン朝海軍指揮官の一人ピーリー・ライース Pîrî Ra'îs が16世紀初頭に、地中海の殆どあらゆる地域の海岸や島々、港などの様子とそこでの航海・操船の方法を、詳細な説明文と地域毎の大縮尺の地図で解説した書物である¹⁾。

本書にはヒジュラ暦927(西暦1521)年成立の原本による写本群(20種余り知られる。以下927年本系写本とする)と同932(同1526)年成立の原本に基づく写本群(10種余り知られる。以下932年本系写本とする)がある。このように、2原本があり、かつそれら原本がともに今日未発見であり、加えてそれぞれの写本が比較的多数知られている²⁾ことが、『キターブ・バフリエ』に関わる研究を少なからず困難にしている。本書の内容に関して近年もトルコならびに欧米の研究者による論考が発表されているが、研究の土台となるべき写本研究は十分に進捗しておらず、その意味で本書をめぐるこれまでのさまざまな議論は脆弱さを免れない。写本研究から始めねばならないのが依然として研究の実態である。

既に筆者は927年本系写本に関して8写本を検討した[新谷 1990b]。また932年本系写本に関しても分析を加えたことがある[新谷 1990a]。後者の場合は、唯一ファクシミリ版で刊行されている Ayasofya 2612写本のみを直接的な検討対象としていたため、その検討結果の普遍性の検証が必要であった。また、残された問題として、927年本と932年本の相互関係の検討を行い、両者の持つ性格の共通性と独自性を明確にしなければならない。さらには、『キターブ・バフリエ』が有する意義を総合的に検討することも必要である。

これらの問題を念頭に置きながら、本稿では先学の研究成果を利用しつつ筆者のこれ

までの研究に新たな写本検討の結果を加えて、まず『キターブ・バフリエ』なる書物の全体像を構成する試みを行いたい。さらにその上で『キターブ・バフリエ』を通して看取できるオスマン朝にとっての地中海世界の像を——実証的手続きが十分でないため試論の域をでないが——その概略なりとも描きたいと考える。ただ、『キターブ・バフリエ』の全体像と言いつつも、ここでは主として932年本系写本に基づく議論であることを予めご承知おき願いたい。

I 『キターブ・バフリエ』の全体像——932年本系写本, 情報源, 影響

1. 932年本系写本

(1) 検討対象写本

『キターブ・バフリエ』932年系写本はこれまでのところ11種知られている(表1参照)。しかしこれらのうち Nuruosmaniye Kütüphanesi 2989, 3004の2写本は第1次大戦時に他の多くの写本と共に紛失し現在所在は不明である。さらに Deniz Müzesi Kütüphanesi 988, 989の2写本はトルコ共和国海軍博物館(在イスタンブル)の展示物として保管されマイクロフィルム化が許されなかった³⁾ため、実際に手元で検討可能な写本は表1で左端欄に番号を付した7種である。

表1 『キターブ・バフリエ』932年本系写本

	所 蔵 機 関	所在地	写 本 番 号
1	Bibliothèque nationale	Paris	Supplément turc 956
2	İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi	İstanbul	TY 6605
3	Köprülü Zade Fazıl Ahmad Paşa Kütüphanesi	İstanbul	171
4	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	Ayasofya 2612
5	Süleymaniye Kütüphanesi	İstanbul	Revan 1633
6	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	Hüsrev Paşa 264
7	Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	Hazine 642
	Nuruosmaniye Kütüphanesi	İstanbul	2989(紛失)
	Nuruosmaniye Kütüphanesi	İstanbul	3004(紛失)
	Deniz Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	988(撮影不可)
	Deniz Müzesi Kütüphanesi	İstanbul	989(撮影不可)

Ayasofya 2612は上述の通りファクシミリ版で出版されているのでそれを利用し、その他はいずれもマイクロフィルムの形で取り寄せて利用した。7写本の内パリにある Supplément turc 956を除いてトルコにある6写本は、いずれも短時間ながら筆者が実物を現地で直接検討したことがある。なお、Hüsrev Paşa 264は通常各章末毎に付される関係地図を一切有していない。ただ写本中各章末に地図を描くべき空白は用意されており、地図の付いた元本から写されたことは確かと思われる。これとは逆に、Biblioteca Universitaria di Bologna Ms. 3609, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Bağdat 338の2写本は地図のみで構成され説明文を持たない。これらは『キターブ・バフリエ』932年本に由来する写本であると思われる⁴⁾が、ここでは本文の説明文を主体に検討するため、地図のみの写本については差し当たり考慮しないことにする。以下、Ayasofya 2612を当面の比較の中心にして手元の932年本系写本7種を検討する。

(2) 本文の構成(叙述順)

検討対象とした932年本系7写本の本文全体の構成即ち叙述順を比べてみるために、欠落部分等を含めて異同の主な点を表2に整理しておいた。Mūtūn (Modon)関係の章, İstānpūliya (İstānbūliya=Astypalea<表2 注*1参照>)関係の章で写本間の相違が目につく。また写本によっては落丁や一部の筆写洩れが生じている。しかし、これらの点を別にすれば全体で210章(İstānpūliyaの章を含めれば211章)からなる932年本本文の全体的な構成(叙述順)に関しては、大きな異同が無く、基本的にほぼ一致することが知られる。

また、これまでに筆者が Ayasofya 2612に関して叙述順の特異性を指摘してきたエーゲ海域と西地中海北岸部[新谷 1990a: 113-121]に注目して調べてみると、他の6写本でもやはり同様の特異性を確認できる。即ち、Ayasofya 2612ではエーゲ海域は本文の冒頭と末尾に分けて説明されており、その中での説明順も奇異な印象を与えるものであった。他の6写本いずれにおいても各地域の説明順は Ayasofya 2612と同様であり、写本による相違点は殆ど無い。また西地中海北岸部については Ayasofya 2612では、説明される地域の移動方向に対してその地域内での説明地点の移動方向が逆になっていた⁵⁾。このことは他の区域では見られないことであり、西地中海北岸部に関する叙述の際立った特徴であった。この特徴が Ayasofya 2612以外の6写本でも同様に確かめられるのである。

以上のように、構成及び地域毎の説明順を見る限り、Ayasofya 2612は決して特殊な写本ではなく、『キターブ・バフリエ』932年本系写本の普遍的特徴を具えていると考えてよさそうである。従って、海軍博物館所蔵の2写本を十分に検討していない段階である

表 2 7 写本構成比較

	写本番号	第53章 Mütün			Istānpūliya の章 ^{*1}		その他の欠落等
		章の独立 ^{a)}	章題 ^{b)}	前章との分離 ^{c)}	有無	第195章の前後	
1	Supplément turc 956	独立	無	? (分離) ^{*2}	有	後	
2	TY 6605	独立	有	? (分離)	有	前	第114章 (Galībūlī) ^{*3}
3	Köprülü Zade F.A.P.K.171	独立	無	? (分離)	有	後	
4	Ayasofya 2612	独立	有	非分離	無	—	
5	Hüsrev Pasa 264	独立	有	分離	有	前	第114章 (Galībūlī) (撮影洩れと思われる) ^{*4}
6	Hazine 642	独立	有	非分離	無	—	第164章 (Abū Ghūr 湾) の一部 (撮影洩れと思われる) ^{*5}
7	Revan 1633	非独立	無	?	有	後	第82章 (Rūyīna 城) の地図, 第83章 (Ūrsāra) の説明文, 第91章 (Rashtī) から第107章 (Māfurdūniya のすべて, 第108章 (Bārlita 城, Tirā 城) の一部 (いずれも落丁と思われる), 第131章 (Jinwīz の海岸) の中間部 (抜けたまま連続して筆写されている) ^{*6}

a) 内容的に前章と明確に区別されているか否かを示す。

b) 通常各章の冒頭に示される章題の有無を示す。

c) 前章との間に空白を取っている (通常はページを改める) か否かを示す。

表注

*1 Istānpūliya (Istānbūliya または Istūnpūliya) は, 地図から知られる島の形態やクレタ島, アナフィ Anafi 島に近いはずである点から考えて, コス Kos 島とアナフィ島の間位置する Astypalea 島 (現ギリシア領) のことと思われる。Istānpūliya とはこの名前の音を反映したものであろう。上の表で明らかなように, この島に関する章は Ayasofya 2612 と Hazine 642 には無く, 残り 5 写本に現われる。そのうち 2 写本では第195章 (Karpa; Karpathos 島) の前に置かれ, 3 写本では後に置かれている。前後のいずれであっても説明順 (構成) としては特に不自然ではないため, 現状ではいずれが本来の位置か決することは出来ない。

*2 第52章がページ末尾で終わり, 第53章は次ページ冒頭から始まるので, 分離しているとみなすことも可能である。

*3 前後の葉には連続した葉番号が記入されている (2 種の葉番号が記入されている。葉中央左の番号では 200, [判読不能], 202..., 葉左肩の番号では 201, 202, 203... となっている)。もともと筆写されなかったか, 筆写後葉番号記入の前に落丁が生じたか, いずれかであろう。

*4 227a の右側の空白ページ (本来地図が描かれるスペースだが, この写本には一切地図はない) はフィルム上で判断する限り 226b と思われる。従って, この章が書かれているはずの 225b, 226a (見開き 2 ページ分) の撮影洩れであろう。

*5 見開き 2 ページ分が欠けているので落丁ではない。

*6 これは筆写の際に筆写生が元本 1 葉分を見落したために起こった不手際であろう。

が, 新谷 1990a で指摘した Ayasofya 2612 本文に見られる構成, 叙述上の特徴, 性格はほぼそのまま同書 932 年本系写本全体に共通すると考えておいてよいであろう。

なお, Ayasofya 2612 をもとに検討したところでは, 区域毎の叙述分量に不均衡が見られた [新谷 1990a : 121-126]。7 写本の本文すべてを逐一比較検討する作業は後日に譲

るが、各写本を一瞥し、次項(3)で見るようにごく一部を比較対照した限りでは、構成、叙述順に限らず、本文の内容従って叙述分量に関しても、写本間に大きな異同はないのではないかとの見通しを持っている。

(3) 本文の内容

既に指摘されているとおり、Ayasofya 2612の本文に盛り込まれた情報は地理的情報、航海法情報、歴史的情報の3種に大別できる。先に筆者はこのうちまず第3の歴史的情報について、地中海の区域毎にそれが現れる頻度、行為の当事者、さらに行為内容进行分析した。その結果、歴史的情報は他の区域に比較して西地中海区域、北アフリカ沿岸区域に相対的に多く、内容的にピーリー・ライースらの海賊行為あるいは征服行為に関わる記述が多く現れることがその理由になっていること、また西地中海区域の特に北岸部分は叙述の流れ、章当りのページ数と行数の点に加えて、歴史的な情報の量と内容の点でも特異な性格を有する部分であることが明らかになった[新谷 1990a: 130-133]。

これらの点を他の6写本でも確認するために、Ayasofya 2612写本第133章「フランス国の Īzla Dāra 諸島とその対面の海岸にある町々及び諸港」の、歴史的情報の部分と比較してみた⁶⁾。本来6写本の本文すべての内容を逐一比較対照して異同を確認するべきであるが、本稿ではごく一部の比較に限ったことをご了承いただきたい。なお、Īzla Dāra 即ち Hyères 諸島はフランスのトゥーロン東方の沖合の島々である。

この部分に関する限り、Revan 1633を除いて他の5写本は Ayasofya 2612と殆ど完全に一致している。Revan 1633も脱落、付加が多少見られるが、基本的な記述内容は一致している。Revan 1633は表2から知られるように、いくつかの章を欠いているなど、7写本の中では比較的問題が目につく写本である。その点に留意しつつ敢えて見通しを立てれば、932年本系写本は概ね内容上も高い共通性を有していると考えてよいだろう。仮にそうであれば筆者が既に指摘した Ayasofya 2612の歴史的情報に関する特色とそこから派生する問題は932年本系写本に広く当てはまることになる。

2. 『キターブ・バフリエ』の情報源

それでは、『キターブ・バフリエ』に盛り込まれた地中海に関する知識の情報源はどのようなものであったのか。それには大別して①ピーリー・ライース自身の航海者としての経験、②先人の著作、が考えられよう。

まず航海者としてのピーリー・ライースの個人的経験の豊かさは否定できないところ

であろう。幼い頃から続いた彼の船上での生活を考えれば容易に納得できることである。しかし、『キターブ・バフリエ』が島々も含めた地中海沿岸を極めて具体的かつ詳細に説明している点に鑑みて、本書に述べられている内容がすべて彼の個人的な経験に基づくとする考えは俄かに受け容れがたいものである。それゆえ、先人の経験と知識の蓄積物であるなんらかの著作物が前提にあり、その上に彼の経験的知識が積み重ねられてはじめて成立しえた書物と考えるべきではなかろうか。

それではその先人の経験と知識の蓄積を伝えたものは何か。まず考えなければならないのは地中海における海図、航海案内書の伝統と、各地で発達した地理学的知識の影響であろう。しかし海図、航海書の伝統に関しては、オスマン朝内部では『キターブ・バフリエ』の先例と言うべきものを確認できない。従って、オスマン朝以外の、地中海地域を構成する諸国特にイタリアの諸都市国家などでの著作物が問題になろう。その代表的存在が13-17世紀を中心に地中海海域で用いられた portolano と呼ばれる海図あるいは航海案内書である。地中海での航海に広く用いられたと言われる portolano がピーリー・ライースにも有益な知識・情報を提供していたのは間違いのないところであろう。

しかし一方、『キターブ・バフリエ』には通常の portolano には見られない特徴がある。即ち、ピーリー・ライース自身による構成上の工夫、実体験記述、地中海を包括的に扱っていること、及び大縮尺の地図を用いていることなどであり、これらの点を十分考慮しなければならない。『キターブ・バフリエ』は portolano とはかなり違った姿を見せているのである⁷⁾。

各地で発達した地理学的知識に関して、プトレマイオスの『地理学』とその流れを汲む後世の著作の重要性に注目しなければならないことは Kissling が指摘する通りである [Kissling 1973]。プトレマイオスの『地理学』は15世紀初頭にギリシア語からラテン語訳されたことを契機にヨーロッパで本格的に蘇った。以後のヨーロッパの地理学は復活したプトレマイオスの『地理学』を基礎に新たな発展段階に入り、いわゆる大航海時代の到来と相俟って16, 17世紀に多くの新しい地理的知見をもたらす。その成果が東方に伝播したと考えることは、当時の地中海における人と文化の交流の活発さを思えばごく自然であろう。

一方イスラーム世界においてはアラブ地理学の伝統も忘れてはならない。しかし少なくともイドリースーの地理書などを見る限り⁸⁾は、叙述の形態、内容が異なり、『キターブ・バフリエ』がそれから直接に影響を受けているとは考えにくいように思われる⁹⁾。

翻って、Andrew C. Hess も指摘する通りメフメット 2 世以後オスマン朝宮廷は海洋に

関する知識を積極的に収集した[Hess 1970:1902-3]のであり、本書が書かれた場所はダーダネルス海峡に面し海洋活動の伝統豊かな都市ガリポリであった。そういった点も考えあわせれば、本書の情報源を特定の書物に求めるべきではないのかも知れない。著者の直接体験、仲間から得た生の情報、先人の著作から得られた知識が一体となり、再度整理され秩序付けられたものが本書であるとも考えられよう。いずれにせよ、情報源に関しては目下のところ結論を得ることは困難であるが、今後もさまざまな角度から探求すべきである。そしてそれはオスマン朝とそれを取り巻く諸文化圏との広い意味での文化的、社会的交流を考える際の大きな足掛りの一つとなると思われ、その意味で重要な意義を有する。

3. 『キターブ・バフリエ』の影響

現在に伝えられている文献を見る限り、オスマン朝史を通じて『キターブ・バフリエ』は類書の稀な書物である。19世紀以降の西欧的技術、知識の導入による「改革期」はともかく、それ以前に関しては同様な書物を殆ど挙げることはできない。その意味ではオスマン朝史においては孤立した書物と言えよう。仮に類書の有無、多寡を以て同時代および後世への影響の大小を計るというのであれば、本書の影響は大きいとは言えないかも知れない。しかし、我々は今日知られている写本が多数にのぼること、およびそれらの書写年代が幅広いことに注目しなければならない。

十分な組織的調査が行われていない現在、927年本系、932年本系それぞれについて伝わっている写本数を正確に指摘することは実は困難である。しかし、先学の教えるところおよび筆者のごく短期間の現地調査の結果によれば、既に述べたとおり現在のところ927年本系については20種以上、932年本系でも10種以上計30種以上の写本が存在しているかあるいはかつて存在したことが判明している。また、写本の書写年代が確かめられる写本の内では、早いものは1570年(ヒジュラ暦977年第10月初め)、遅いものは1770年(ヒジュラ暦1184年)まで下ると思われる。原本の成立が1521年および1526年であるから、少なくとも200年ないし250年間に亘って書写が行われていたことになる。このことは、この間『キターブ・バフリエ』が書写に値する書物、換言すれば有効性を失っていない書物と考えられていたことを意味する。そのような事情に鑑みれば、『キターブ・バフリエ』は同時代および後世へ少なからぬ影響を及ぼした書物と言って差し支え無いのではなかろうか。

さて『キターブ・バフリエ』はこのような姿を我々に見せる書物であった。それでは本書、ここでは特に932年本系写本を通して看取できる、オスマン朝にとっての地中海世界¹⁰⁾の問題を以下で考えてみたい。

Ⅱ オスマン朝の地中海世界

1. 15, 16世紀の地中海に臨む政治勢力

15, 16世紀はオスマン朝がその版図を急激に拡大し、地中海とそれを取り巻く地域にも広く勢力を伸ばした時期である。1520年スレイマーン即位の時点で地中海地方に領域を持ったさまざまな政治勢力を一瞥すると次の通りである。

まず、アドリア海北岸地方特にダルマティア海岸ではヴェネツィアが有力であり、イタリア半島ではミラノ、サヴォイ、ジェノヴァ、ヴェネツィア(以上半島北部)、ローマ教皇、フィレンツェ(中部)、スペイン王家(南部及びシチリア)などが割拠していた。さらにフランス王国、統一間も無いスペインが地中海に長い海岸線を有している。対岸のマグリブ(北アフリカ西部)ではモロッコのワッタース Wattās 朝(1472-1549)、アルジェリアのザイヤーン Zayyān(アブドゥル・ワード ‘Abd al-Wād)朝(1236-1550)、チュニジアのハフス Ḥafṣ 朝(1228-1574)が地中海に臨んでいる。以上が概ね地中海の西部に相当する。東部に目を転ずると、ほぼそこはオスマン朝の海と化していた。オスマン朝の主要な領域であるアナトリア、バルカン両半島部は言うまでもなく、セリム1世時代にマムルーク朝を滅ぼして、シリア、エジプトを版図に加えていたため、地中海の東半分はごく一部のヴェネツィア領などを除いてほぼ完全にオスマン朝によって囲まれていた。

このように1520年の段階でオスマン朝は地中海の東半分を押さえる巨大な勢力となっていた。言うまでもなく、版図の大小がそのまま地中海との関わりの深さを表すことにはならないであろう。政治的・軍事的な制圧の程度、交易の活発度、生活文化の有様など、地中海との現実上の関わりの深さについてさまざまな面から検討しなければならない¹¹⁾。しかし、版図の広さ、それもほぼ切れ目なく東地中海を囲むように広がる様子は、オスマン朝と地中海の関係を我々に強く印象づけるものである。

スレイマーンの治世(1520-1566)はオスマン朝の最盛期とされる。それが決して単純な繁栄の時期でないことは改めて言うまでもないが、しかしオスマン朝の勢力範囲が内陸部のみならず地中海の海上、沿岸部においても大いに伸張したことは、確かに最盛期としての一面を表しているとも言えよう。この時代に活動したピーリー・ライース、ハイルッディーン・バルバロス¹²⁾、トゥルグート・ライース¹³⁾らの活躍でマグリブも属領とし

てオスマン朝の支配下に入った。オスマン朝は一帯の制海権を掌握して東地中海のみならず西地中海までも自らの勢力下におくことができたのである。

2. オスマン朝の地中海世界

このようにオスマン朝は15,16世紀を通じて、その時代の地中海地域の構成員、それも重要な構成員となった。そこで以下オスマン朝と地中海との関わりについて、我々は『キターブ・バフリエ』から何を読み取ることができるか検討したい。

(1) ピーリー・ライースの地中海認識

『キターブ・バフリエ』の著者ピーリー・ライースには地中海はどのように認識されていたのであろうか。この点に関しては『キターブ・バフリエ』の説明の対象が、単にマルマラ海、エーゲ海にとどまらず、地中海全体に亘っていることは大いに示唆的である。

かつてメフメット2世の治世末期1480年にオスマン朝軍はイタリア半島に遠征し、半島南東端に位置するオトラントに軍の一部が上陸した。オスマン朝の人々¹⁴⁾によって、ごく近辺のマルマラ海、エーゲ海のみが彼らにとっての「海」と意識されていたのではなく、すでにその時点でイタリア南部にまでその視界が広がっていたことはこの一事をもってしても明白である。さらにバヤズィット2世の治世にはレコンキスタの最後の攻勢に晒されたイベリア半島のイスラーム教徒から支援を要請されたこともあり、それ以後16世紀初めまでの時点で、オスマン朝の人々の認識はティレニア海を越え、西地中海に及んでジブラルタル海峡に達している。ピーリー・ライースの認識も同様に拡大していたことは想像に難くない。加えて、彼の地中海に関する認識は単なる知識にとどまるのではない。地中海は東西にわたってピーリー・ライースははじめオスマン朝の人々が実際に活動する「現場」でもあったのである。そのことは『キターブ・バフリエ』の本文に述べられている通りである¹⁵⁾。

ピーリー・ライースは『キターブ・バフリエ』において地中海全体を視野に納め、地中海の全体を把握していたと言えるであろう。地中海は一つのまとまりをもった世界として彼の中で認識されていたに違いない。そのように認識された全体としての地中海が彼の地中海であり、ひいてはそれが当時のオスマン朝の地中海であると言ってよいであろう。『キターブ・バフリエ』はそのような地中海認識を反映した書物なのである。勿論その地中海が内部で政治的あるいは文化的な相互関連性を有する空間として認識されていたかどうかは別問題であるが、『キターブ・バフリエ』において地理的認識、視野がこのよ

うに拡大され、地中海が総体として把握されていたことは十分に注目されてよいことであろう。そして、そのような地中海に対する視野と認識の拡大があったからこそ16世紀のスレイマーン治世にオスマン朝の勢力が西地中海にまで拡大し得たとも言えよう。その意味で16世紀のオスマン朝の地中海覇権は決して偶然の所産ではない。

(2) オスマン朝の地中海世界

それでは地中海地域はオスマン朝にとってどれほどの重要性を有したのであるだろうか。政治、経済、文化などさまざまな面から検討されねばならない問題であるが、ここでは概括的にオスマン朝の版図、勢力圏における地中海地域の比重を考えてみることにしたい。

『キターブ・バフリエ』が成立した16世紀初頭の時点で、オスマン朝を構成する主な地域はバルカン半島、アナトリア半島、シリア、イラク、エジプトそしてマグリブである。当時のオスマン朝は独自の歴史を重ねた多様な性格の地域から成るのであるが、それぞれの地域において経済、社会生活上あるいは文化的に地中海と関係が密接な地中海沿岸部分と地中海とは比較的縁が浅い内陸部とに大きく分かつことができるであろう。前者はおおよそ地中海地域に含まれる領域であり、後者はそれ以外の領域であると言えよう。

オスマン朝が地中海でもっとも強盛であった時期にも、地中海とは縁が浅く地中海地域に含まれない、バルカン半島やイラク、アラビア半島、エジプトなどの内陸部領域の多くが、政治的、経済的、文化的のあらゆる面でオスマン朝を支える重要要素であったことは言うまでもない。しかし一方で、地中海地域に含まれるべき沿岸部地域もやはり領域的な比重は決して小さくない。地中海地域に含まれるべき領域とそうでない領域の截然とした区分を筆者が提示していないため、このような漠然とした表現では論理性を欠いた議論に陥るが、少なくともオスマン朝の版図内に延びる地中海の長い海岸線、あたかもオスマン朝領域がその懷に地中海を包み込むかのような姿は、オスマン朝にとっての地中海地域の重要性を我々に強く想起させるものである。地中海地域がオスマン朝の切り離すことのできない主要な一部となっていると言ってもよいのではないだろうか。

そしてその主要な一部を構成する地中海地域を克明に説明するものこそ他ならぬ『キターブ・バフリエ』である。その説明は、海岸線と島々に関するその具体的で詳細な描写や航海方法のみならず、交易や戦いの有様にも及んでいる。そこに我々は、日常的な経済活動あるいは戦争という形態の人々の接触の場としての地中海世界が描きだされているのを見る。地中海はオスマン朝の人々にとって決して縁遠いものではないし、また地中海世界も彼らにごく身近なものとして存在しているのである。

最後にそれでは、オスマン朝にとってのそのような地中海世界の重要性の証をどこに求めることが出来るであろうか。あえて端的に表現すれば、『キターブ・バフリエ』をオスマン朝が生んだこと自体がその証の一つと言えるのではなかろうか。地中海世界がオスマン朝の人々にとって重要でなければ、このような包括的でなおかつ実用的な地中海航海案内書は現れ得たであろうか。その意味で、『キターブ・バフリエ』はオスマン朝の地中海世界とその重要性を物語る証人と言えよう。

おわりに

以上932年本系写本を中心に『キターブ・バフリエ』の全体像と、同書から知られるピーリー・ライースひいてはオスマン朝にとっての地中海世界の意味を考えてきた。多分に仮定や推論を交えており、その意味で試論の域を出ない部分を含むことを改めてお断りしたい。

結びにかえて今後の課題に触れておきたい。まず932年本系写本のより詳細な内容分析が必要である。本文はもとより、932本系写本の特徴である前文(解説)の内容も検討せねばならない¹⁶⁾。また、927年本系写本に関してもさらに詳細かつ総合的な検討を加えていく必要がある。先の8写本の検討[新谷 1990b]以後、殆どの写本のフィルムが我が国にもたらされているので、研究の条件は整ってきている¹⁷⁾。さらに927年本系、932年本系両者を構成・内容など様々な角度から比較検討しなくてはならない。そのような作業を通じて我々は『キターブ・バフリエ』の、言葉の真の意味での全体像を知ることが出来るのである。ピーリー・ライースのもう一つの著名な業績、アメリカ大陸を含む世界地図¹⁸⁾をめぐる問題に関しては、これまで筆者はその重要性を認識しつつも殆ど言及してこなかったが、それはまず第一に地中海を対象にした『キターブ・バフリエ』の研究に焦点を絞るべきと考えたからにはほかならない。『キターブ・バフリエ』研究がある程度以上に進展してはじめて、世界地図およびそれと『キターブ・バフリエ』との関係などの問題を総合的に検討できるようになるであろう。そのような基礎的な研究が進捗した時に、オスマン朝の地中海世界の問題をより実証的に考えていくことが可能になるであろう。

注

- 1) 我が国では三橋富治男の紹介、研究によってつとに知られた書物である。三橋 1966a: 211-221, 同 1970, 同 1976など参照。
- 2) 2種の原本とそれぞれの写本の事情の概略については、新谷 1990a: 110-111および新谷

1990b を参照されたい。

- 3) 1991年夏の現地調査の際、海軍博物館当局が筆者の要請を容れてこれら932年本系2写本および併せて所蔵されている927年本系2写本計4写本を展示ケースを破って出して下さったので、ごく短時間であったが実際に手にして見る事ができた。さらにそれぞれの写本の写真も数葉ずつではあるが持参のカメラで撮ることができた。残念ながらその成果は本稿には反映されていないが、便宜をはかって下さった方々に謝意を表する。

- 4) Bologna Ms. 3609に関して、Babinger はこれを『キターブ・バフリエ』とは別の書物と考えた。彼は Ms. 3609の表題ページの内容から、これがメフメット4世治世初期(17世紀半ば)に Sayyid Nūh なる人物の手によって成った書物であり、著者の出身は不明ながら稚拙なアラブ語とトルコ語から判断してイスラームへの改宗者と思われると述べている。彼はこの海図集を同図書館所蔵の『キターブ・バフリエ』写本 Ms. 3613に劣らず重要であるとする[Babinger 1955]。Kissling はこれを *Der See-Atlas des Sejjid Nūh* と題して出版している[Kissling 1967](筆者未見)。

一方 Soucek は Ms. 3609を『キターブ・バフリエ』の地図のみの集成物と考え[Soucek 1973b : 245], Sayyid Nūh とは架空の名であり、素人の写本購入客相手にふざけ半分でもっともらしく付けられた名前であろうとして、Babinger の見解を一蹴している[Soucek 1973a : 245, 253]。Sayyid Nūh とその著作に関して他に殆ど情報がなくて分からないという Babinger の嘆きは、このように考えればとも容易に解消する。事実 Ms. 3609の地図は『キターブ・バフリエ』932年本系写本に納められている地図に酷似している。試みに Ayasofya 2612の地図と比較すると、若干の相違は有るものの類似性が極めて高い。Ms. 3609は『キターブ・バフリエ』932年本を基礎にその各章の地図のみを集成したものと考えておくのが現時点では最も妥当であろうと思われる、Sayyid Nūh もついても恐らく Soucek の考える通りであろう。

また, Bagdat 338は表題も目次も持たない全く地図のみの写本であり、著者名も無い。Soucek はこれも『キターブ・バフリエ』の地図のみの集成物と考える[Soucek 1973b : 245]。筆者が比較した限り『キターブ・バフリエ』932年本系の地図部分と類似性が高く、Ms. 3609と同様の性格の書物と思われる。

このように Ms.3609及び Bagdat 338はともに『キターブ・バフリエ』932年本に由来する地図写本と考えられるが、一方、『キターブ・バフリエ』以前に既に別に『海図集成』とも言うべきものが存在してピーリー・ライースが『キターブ・バフリエ』編纂に際して各章の地図に利用し、一方『海図集成』はそれ自体独自に流布して Ms.3609や Bagdat 338などとして現われた可能性も検討されねばなるまい。

- 5) イタリア半島西海岸部からジブラルタル海峡に至る部分は13の区域に分かれたれ、各区域には1章が当てられている(第127章から第139章)。イタリア南端部を含む区域からジブラルタルを含む区域まで、説明される区域は順に南から北へさらに西へと移動するが、各区域の中では都市、港湾

などの説明は北から南へ、西から東へと逆になっている。例えば第127章ではこの章で説明される都市の中で最も北に位置する Policastro から最南部の Reggio まで北から南へと説明される。本来であれば Reggio から Policastro に向かって説明されるはずである。第128章以下139章までも事情は同じである。この13章以外ではこのようなことは起こっていない[新谷 1990a : 118-121]。

6) 第133章の一部を示すと次の通りである。

この Īzla Dāra [Îles d'Hyères] 諸島をトルコの人々は「三つの島」という。フランス国ではその島々は有名である。トルコとアラブの艦隊が襲撃する所である。その海岸部から商いをするカーフィルの船が絶えず往来しているからである。我々は故カマル・ライースと、一度ここで3隻のバルチャ barcha 船を一挙に襲撃し、チュニスに移して売った。・・・[Ayasofya 2612 : 578]

・・・この町を Iras [Hyères] という。しかし、アラブ人たちは Lārīsh という。その北東側に製塩所があり、そこから毎年バルチャが塩を積んで買って行く。その製塩所の近くを川が流れている。川に面している海岸はすべて波静かな美しい投錨地である。このあたりは3~400隻が一度に停泊できるほどの港である。もし沖から風が吹くと島々が海から波を来させない。仕切りになる。

さて、上述の製塩所の東側に西面した入り江がある。入り江全体がバルチャ船用の停泊地で、そこからバルチャ船3隻を我々は一挙に捕えた。・・・[同 : 580]

7) portolano と『キターブ・バフリエ』の類似性と相違点に関しては、新谷 1991でも概略的に触れている。

8) Abou-'Abdallah Moh. Edrisi, *Description de l'Afrique et de l'Espagne (al-Maghrib wa Arḍ al-Sūdān wa Miṣr wa al-Andalus ma'akhūḍhat min Kitāb Nuzhat al-Muṣṭāq fi Ikhtirāq al-Āfāq* [par al-Sharīf al-Idrīsī]), ed. par Reinhart P. A. Dozy & Michaël J. De Goeje, 2vols., Leiden 1866 (Reimpression : Amsterdam 1969)に依拠して、特にイベリア半島部分に関する叙述形態、内容を『キターブ・バフリエ』Ayasofya 2612写本の該当部分と比較したに過ぎない。従ってより正確に判断するには *Nuzhat* の別の部分あるいは他のアラブ地理書との比較検討が必要である。なお、本書(*Description*)の参照に当って稲葉稯氏(京都大学人文科学研究所)に便宜をはかっていた。記して謝意を表する。

9) 『キターブ・バフリエ』への直接的影響よりも、それ以前の portolano などへなにかしらの影響を及ぼしている可能性が高いのではないかとと思われる。仮にこの推定が正しいとすればアラブ地理学の伝統も『キターブ・バフリエ』に最終的に反映しているとも言えようが、今後十分慎重に検討すべき問題と考える。

10) 通常我が国において地中海世界とは、西洋史にいわゆる「古典古代」におけるギリシア・ローマ帝

国の支配領域内に成立したとされる一つの歴史世界をさし、それはローマ帝国の変質・崩壊とともに消滅したと捉えられている。例えば弓削達は、地中海世界を現実には実現しなかった可能的奴隸制社会と規定し[弓削 1977:191-2]、古代ローマ帝国の支配をローマ市民共同体が奴隸性社会への傾斜運動の諸段階にある諸共同体に対して行う支配と捉えた。そして紀元3世紀前後を境に市民共同体がそのような役割を失って帝国の支配は変質し、従って彼の言う地中海世界も崩壊したとする[弓削 1977]。一方、Braudel は「古典古代」から遠く隔たった16世紀後半を中心にした時期の地中海を、内外各地の有機な相互関係の中に成立している統合体として捉え、それを地中海世界 *le Monde méditerranéen* と表現している[Braudel 1966]。また家島彦一は近著において、ピレンヌ・テーゼの扱いに関連して、「有機的結合体としての地中海世界は、古代以後も継続してとらえられるのではないか」と問題提起している[家島 1991:160]。

本稿で筆者が用いようとしている地中海世界の語は、社会構造や地域の相互関連に関する厳密な議論を踏まえたものではない。ごく概括的に、いわゆる古典古代の終焉の後も地中海とそれを取り巻く諸地方がある種の政治的、文化的統一性をもって体现した一つの歴史世界が有り得たのではないかと考えているに過ぎない。そのような歴史世界としての地中海世界を15、16世紀のオスマン朝支配下の地中海について考えてみたいというのが筆者の関心である。

- 11) スペインからオスマン朝へのユダヤ人の移動と軍事技術の伝達を検討する宮武志郎の最近の研究[宮武 1991]もあり、広く地中海地域における人と物の交流を考察する上で示唆に富む。
- 12) Khayr al-Dīn Bārbārūs(生没年1466?-1546)。16世紀初頭ジェルバ島を本拠にマグリブ海岸に勢力を張った。スルターン=スレイマーンに帰順した後、オスマン海軍の中心的指揮官として活動した。1538年のプレヴェザの海戦でオスマン朝海軍を勝利に導いた。
- 13) Tūrhūd Ra'īs(生没年?-1565)。スルターン=スレイマーン時代の海軍指揮官の一人で、マグリブ方面の戦役での活動で知られる。1565年聖ヨハネ騎士修道会の本拠であったマルタ島攻撃戦のさなかに戦死した。
- 14) ここでは支配層、被支配層を問わず、広くオスマン朝領域に生きる人々としておく。
- 15) 著者ピーリー・ライースとその仲間たちをはじめとする人々が、地中海区域と北アフリカ沿岸区域を中心に、盛んに海賊的行為あるいは征服行為に類する行為を行なっている様子が読み取れる[新谷 1990a:126-133]。
- 16) Kurdoğlu & Alpagot 1935に内容解説がある[xli-xlvi]ほか、我が国では三橋富治男の論考がある[三橋 1970; Mitsuhashi 1976]。
- 17) ただし、トルコ共和国海軍博物館所蔵の927年本系2写本は、上で言及した932本系2写本と同じく、複写を許可されなかったため未入手である。
- 18) 1513年と1528年の2度作製された。いずれも今日その一部のみ伝えられている。Kurdoğlu & Alpagot 1935: xvii-xxxvii, 三橋 1966a: 222-234, Inan 1974: 26-47(Inan 1975: 26-47)等参照。

付記 本稿は、第8回日本中東学会年次大会(1992年5月10,11日)において「『キターブ・パフリエ』の全体像とオスマン朝の「地中海世界」」と題して口頭発表した内容に補筆・修正を施したものである。発表の席上出席者から多くの有益な批判と助言を頂き、本稿を草するに当たって参考にした点が多い。文中でいちいちお断りしなかったが、ここに記して謝意を表する。

参考文献(筆者未見の文献を含む)

Alpani, Nexhip P.

1981 Bregdetet e Shqipërisë në fillim të shek. XVI., *Studime Historike*, 35(18)-3, pp. 223-234.

Ἀνδρεάδης, Ἡ.

1980 Ἡ περιγραφὴ τῆς Κύπρου ἀπὸ τὸν Πιρὶ Ρεΐα, *Κυπριακαὶ Σπουδαί*, 44, pp. 107-112.

Babinger, F.

1955 Seyyid Nûh and his Turkish Sailing Handbook, *Imago Mundi*, 12, pp. 180-182.

Bausani, Alessandro

1979 L'Italia nel Kitab-i Bahriyye di Piri Reis, *Il Veltro. Revista della Civiltà Italiana*, 23-2·3, pp. 173-196.

1982 Le Coste Toscane nel Kitab-i Bahriyye di Piri Reis, *Studia Turcologia Memoriae Alexii Bombaci Dicata*, ed. Aldo Gallotta & Ugo Marazzi, Napoli, pp. 29-40.

1982-83 La Costa Campana da Napoli a Policastro nel Portolano di Piri Reis(1521-1527), *Annali della Facoltà di Scienze Politiche*, 9, pp. 71-80.

1983 La Costa Italiana del Tirreno, da Civitavecchia a Ischia, nel Portolano di Piri Reis (1521-1527), *Rasa'il in Memoria di Umberto Rizzitano*, Palermo, pp. 53-64.

1984 Le Coste della Penisola Salentina nel Portolano di Piri Reis, *Studi in Onore Francesco Gabrieli nel Suo Ottantesimo Compleanno*, ed. Renato Traini, 2vols., Roma, pp. 53-59.

Braudel, Fernand

1966 *La Méditerranée et le Monde Méditerranéen à l'Époque de Philippe II*, 2^e édition, 2 vols., Paris(『地中海』(浜名優美訳),全5巻,東京。既刊:I 環境の役割,1991;II 集団の運命と全体の動き1,1992)。

Cardomne, D. D.(trad.)

1765 *Le Flambeau de la Méditerranée*, Bibliothèque Nationale, Fr. 22. 972.

von Diez, Heinrich Friedrich

1811 *Denkwürdigkeiten aus Asien*, Berlin.

Esin, Emel

- 1980 La Géographie Tunisienne de Pîrî Re'îs, à la Lumière des Sources Turques du X^e/X-VI^e Siècle, *Les Cahiers de Tunisie*, Numero Spécial, pp. 585-605.
- 1986 La Description des Côtes Algériennes de Pîrî Re'îs, *Studies on Turkish-Arab Relations*, pp. 47-60.

Herzog, R.

- 1902 Ein Türkisches Werk über das Ägäische Meer aus dem Jahre 1520, *Mitteilungen des Kaiserlich Deutschen Archäologischen Instituts*, Athenische Abteilung, 27, pp. 417-430.

Hess, Andrew C.

- 1970 The Evolution of the Ottoman Seaborne Empire in the Age of the Oceanic Discoveries, 1453-1525, *The American Historical Review*, 75-7, pp. 1892-1919.
- 1974 Piri Reis and the Ottoman Response to the Voyages of Discovery, *Terrae Incognitae*, 6, pp. 19-37.

Hoye, Paul F. & Lunde, Paul

- 1980 Piri Reis and the Hapgood Hypotheses, *Aramco World Magazine*, 31-1, pp. 18-31.

Inan, Afet

- 1937 Bir Türk Amirali, XVI^{ıncı} Asrın Büyük Geografi : Piri Reis, *Belleten*, 1, pp. 317-332 ;
Un Amiral, Geographe Turc du XVI^e Siècle Piri Reis, Auteur de la plus Ancienne Cart
de l'Amerique, *Belleten*, 1, pp. 333-354.
- 1974 *Pîrî Reis'in Hayatı ve Eserleri*, Ankara.
- 1975 *Life and Works of Pîrî Reis*, Ankara.

İrdesel, Mehmet

- 1975 *Büyük Denizci-Bilgin Amiral Gelibolu'lu Pîrî Reis, Hayatı ve Eserleri*, İstanbul.

Kahle, Paul

- 1926 *Pîrî Re'îs, Bahriye, Das Türkische Segelhandbuch für das Mittelländische Meer vom Jahre 1521*, Band I(Text)1, Band II(Übersetzung)1, Berlin, Leipzig.
- 1929 Pîrî Re'îs und Seine Bahriye, *Beiträge zur Historischen Geographie, Kulturgeographie, Ethnographie und Kartographie, vornehmlich des Orients*, Leipzig, Wien, pp. 60-76.
- 1956 The Turkish Sailor and Cartographer, *The Proceedings of the Pakistan History Conference*, ed. S. Moinul Haq, Karachi, pp. 101-111.

Kissling, Hans Joachim

- 1967 *Der See-Atlas des Sejjid Nûh, 1. Teil : Einleitung und Karten*, München.
- 1973 Zur Beschreibung des Rhône-Deltas in der Bahriye des Pîrî-Re'îs, *Islam Tetkikleri Enstitüsü Dergisi*, 5, pp. 279-287.

小松香織

1991 アブデュル・ハミト2世時代のオスマン海軍(1878-97)——「沈黙の艦隊」の実像——,
『お茶の水史学』, 35, pp. 27-48.

1992 19世紀末のオスマン海軍——財政問題を中心に——, 『東洋学報』, 73, pp. 01-025.

Kurdoğlu, F. & Alpagot, H.(ed.)

1935 Piri Reis, *Kitabı Bahriye*, İstanbul.

Mantran, Robert

1973 La Description des Côtes de l'Algérie dans le Kitab-i Bahriye de Piri Reis, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 15・16, pp. 159-168.

1977 La Description de la Côte de la Tunisie dans le *Kitâb-i Bahriye* de Pîri Reis, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 24, pp. 223-235.

1981 La Description des Côtes de l'Égypte dans le *Kitâb-i Bahriye* de Pîrî Reis, *Annales Islamologiques*, 17, pp. 288-310.

1985 La Description des Côtes Méditerranéennes de la France dans le Kitâb-i Bahriye de Pîrî Reis, *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée*, 39, pp. 69-78.

1986 La Description des Côtes de l'Andalousie dans le Kitâb-i Bahriye de Pîrî Reis, *Actes du XII^e Congrès de l'Union Européenne des Arabisants et Islamisants (Malaga 1984)*, Madrid, pp. 497-507.

Mardin, O.

1981 Piri Reis : Turkish Admiral and Cartographer, *The Map Collector*, 16, pp. 16-21.

三橋富治男

1966a 『オスマン=トルコ史論』, 東京.

1966b 「キターブ・パフリエ」の著者ピリー・ライスと世界古地図について, 『オリエント』,
9-2・3, pp. 199-220.

1966c 16世紀・東方水域におけるオスマン=トルコ, 『駿台史学』, 19, pp. 33-53.

1970 ピリー・レイスの「海洋の書」に見えるシナ海, 『オリエント』, 13-3・4, pp. 171-184.

1975 セイデ=アリ=レイスとインド洋——オスマン朝古典史料キャティブ=チェレビイの訳述——, 『千葉大学人文研究』, 4, pp. 11-29.

Mitsuhashi, Fujio

1976 A Study of the “Çin Deniz” in the “Kitab-ı Bahriye” Compiled by Pîrî Reis, *İsmail Hakkı Uzunçarşılı'ya Armağan*, Ankara.

宮武志郎

1991 15・16世紀オスマン海軍による火器技術の受容, 『オリエント』, 34-1, pp. 48-64.

Ökte, Ertuğrul Zekâi(ed.)

1989-92 Pîrî Reis, *Kitab-ı Bahriye*, Vols. 1-4, Ankara.

(Pîrî Ra'îs)

1984 Bahriye—*Κατακτητική ναυσιπλοΐα στο Αιγαίο* (1521), Αθήναι.

Senemoğlu, Yavuz(terc.)

1974 Pîrî Reis, *Kitab-ı Bahriyye, Denizcilik Kitabı*, 2 vols, İstanbul.

新谷英治

1990a “Kitāb-i Bahriya” の性格——Ayasofya 2612写本本文を中心に——, 『東洋史研究』, 49-2, pp. 107-139.

1990b 『キターブ・バフリエ』ヒジュラ暦927年本系写本 8 種, 『京都橘女子大学研究紀要』, 17, pp. 222-246.

1991 『海洋の書』とボルトラーノ, *Mare Nostrum* (京都外国語大学地中海文化研究会研究報告), 3, pp. 68-81.

Soucek, Svat

1971 The 'Ali Macar Reis Atlas' and the *Deniz Kitabı*: their Place in the Genre of Portolan Charts and Atlases, *Imago Mundi*, 25, pp. 17-27.

1973a À propos du Livre d'Instructions Nautiques de Pîrî Re'îs, *Revue des Études Islamiques*, 41, pp. 241-255.

1973b Tunisia in the *Kitab-ı Bahriye* by Piri Reis, *Archivum Ottomanicum*, 5, pp. 129-296.

家島彦一

1991 『イスラム世界の成立と国際商業——国際商業ネットワークの変動を中心に——』, 東京.

弓削達

1977 『地中海世界とローマ帝国』, 東京.

Yurdaydın, H. G.

1952 Kitāb-i Bahriyye'nin Telifi Meselesi, *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Cografya Fakültesi Dergisi*, 10, pp. 143-146.